

沼津市若山牧水記念館

第57号 平成28年9月1日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



わが心すみゆくときによむ歌か
詠みゆくほどに澄める心か 牧水

大正八年の東京は雪の多い冬であった。特に大雪という訳ではないが、正月から二月に掛けて雪が続き、庭は常に雪化粧で、歌心を刺激されたらしい。

散り散らぬ杉のこずゑのしら雪のあらはに見えて鴨啼ひよな
きあそぶ
うす青み煙草たばこのけむりたちのぼる軒端のきばあやふく大雪積おほゆき
めり

この年、牧水数え年三十五歳。大正六年に移住した巢鴨町一二五〇番地に住んでいたが、家にいたのはこの雪の季節だけという感じで。一月の初めには千葉県犬吠埼、三月には長野の辰野、四月は群馬県磯部温泉、そして五月は榛名の山上湖、六月に潮来、筑波と動き、八月に同じ巢鴨の一四九三番地に転居したが、月末には九十九里浜、十月から十一月にかけては長野県の星野温泉に遊び、大町、松本と渡り歩き、十二月には千葉の大原海岸に泊っているのだ。

掲示の作品は、第十三歌集『くろ土』所収の二月後半に詠まれた「述懐二三」と題する八首のうちの一首で、

うつつにしわが生きてゐるけふの日とほのかにおもふ心澄みつつ
よき下駄を履かなと思ひあゆみをるけふの心のさびしくもあるか
などと並んで発表されている。

掲示の作品の願望のような思いは観念に近く、全集で読んだ時は現状に対する悲観的な思いと読み過ぎしてしまったのだが、『くろ土』の自序の中で牧水は

「やれやれ今になつて漸く自分には歌といふものが解つて来たのかなア」といふ気持である。延いては「これが真実の意味に於ける自分の処女歌集といふものかも知れない」といふ気持である。

と書いている。この自序をこの歌に重ねてみると、短歌に対する覚悟のような、あるいは、自己発見でもあるように感ずるのである。

「わが心すみゆくときにこそ歌ができる」逆に言えば「心が澄みゆかなくては歌ができない」という主張であろう。そして「詠みゆくほどに澄める心」、心の中を手探るような、詠むことへの肯定、納得を暗示する心は、簡単には詠めない言葉であろうと思つた。

なお、この半切は、昨秋富士市の佐藤雄二氏から寄贈されたもの。氏の母方の祖父佐藤一泉氏が福島県三春の医師で、牧水が大正十五年に東北から北海道へ揮毫旅行に出掛けた帰路、三春に立ち寄った時のものと思われる。貴重な資料となる半切を前にして牧水の心が直に伝わってくるような思いに、感無量であった。(須永秀生)

散文と短歌の響きあい

東 直子

今早稲田大学で、「短詩型文学論」という授業を受け持っていて、近代から現代にかけての詩歌の流れを講義している。

早稲田大学といえ、若山牧水の母校である。今を生きた若者たちに毎日接しながら、こんなふうに若かった若山牧水と北原白秋と土岐善麿が、この大学で出会ったかと思うと、感慨深い。

西洋の全く新しい文化が流れ込み、国そのものが青春を迎えていた明治、大正期の若者としての彼らの青春の日々を、まぶしく想像する。

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら死せ果てよいま

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君

なんともテンションが高い、とあらためて思う。ほとんどの教科書に載り、世代を超えて知られている「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」を含め、牧水が二十代前半のときに作った歌である。青春のエネルギを、海に注ぐ光そのものように惜しげもなく放出したこれらの歌は、その一瞬一瞬をいかに敏感に受け取っていたかも伝えてくる。

彼がのちに、旅をこよなく愛し、旅の途上で出会った人々と魂の交流をし、土地を慈しみ、そこで起こったできごとを丁寧な散文として書きとめていったことと、瞬間のエネルギを閉じこめる技を短歌で得たことは、無縁ではないだろう。

私は、十数年前から小説も書くようになり、又それ以前からエッセイも書いている。時にはそうした散文に短歌を添えることもある。添える短歌は、紀行文のようにその場のことを思い出しつつ創出した作品のこともあれば、別の機会に作られた、本来は関わりのない、他の人の作品を用いることもある。散文で伝えようとした内容や情感と響きあう短歌を探し出して添え、散文のみ、あるいは短歌のみ、あるいは違う味わいが生まれたら、と願ったのである。

作家の堀江敏幸さんが、テレビで私のエッセイ集『耳うらの星』を取り上げて下さったときに、散文の最後の置かれた短歌を「新たな扉が開く楽しみがある」と述べていただいたことを、今も嬉しく覚えている。

六年前に出版した『十階』という歌集は、二〇〇七年に毎日作った短歌に、日記としての数行の短文を添えたものである。一例をあげると次のような形である。

9/2

夏休み最後の日曜日。噴水のある公園を抜けて、道をとぎとぎ振り返りながら歩いてみる。

あの子のように。

あたまから冷たい水をかけあつた姉妹はどんな遠くへ行くの

夏休みが終わるということは、子どもにとつての夏が終わるということ。公園で、その夏の日々を惜しむように、何度も振り返りながら去っていく子どもを見かけた。目の前にいる子どもと、自分の子どもたちが小さかったときのこと、さらには、自分が小さかったころの記憶にもさかのぼり、夏を経て変化していく子どもたちの普遍的な感覚に思いを馳せ、一首を作った。散文に書いたことと、短歌として描いたことは、密接に繋がっているわけではない。付かず離れずのその間に、なんかの味わいが生じるのを期待している。このような方法を好まない人もいるようなのだが、私は、散文と韻文を重ねることで生じる文学の可能性を、今後も探っていきたいと思っている。

そうした観点から、散文と短歌との響きあいを模索した第一人者である若山牧水の紀行文が、とても興味深い。今回は、紀行文『津軽野』を読み解きながら、牧水の散文とそこに置かれた短歌との響き合いを探っていくと思う。テキストは、岩波文庫の『みなかみ紀行』を使用する。



『海より山より』

「津軽野」は、タイトル通り、青森県の津軽を訪ねた折りの紀行文で、大正七年新潮社刊の『海より山より』に収録された。牧水三十二歳の時である。実際に津軽を訪ねたのは、それより二年前の大正五年の三月末。二人の子供に恵まれ、歌集や散文集を次々に出版し、四十三年間の生涯の中でも、公私共に最も充実していた時期にあたるだろう。津軽では、「永い間の交際で今日初めて逢うはずの未見の友」として登場する加藤東籬を訪ねている。「青森県近代文学館」ホームページの記述によると、加藤東籬は、「病弱のため青森師範学校、東奥義塾のいずれも中退。果たせなかつた学業への情熱を讀書に転化させ、漢籍、仏典、聖書、トルストイさらには社会主義の文献なども読み、危険思想家と見なされたこともあった」とある。独学で思想を学ぼうちに短歌の創作も始めた加藤は、すでに高い評価を得ていた牧水という存在がたいへんまぶしく、初めての対面を、それはそれは楽しみにしていたことだろう。

この加藤が、突如歌をうたい出す場面がある。

風呂上がりに、牧水が「雨のような盃を引受け引受け飲み干さざるを得ないと書く、大量の酒が酌み交わされていた座の中で、加藤が、津軽の唄を、他の人につられるようにうたったのである。「彼生れて四十年の間、ただの一度も唄った事のない人であった」らしいのに！

「加藤さんが唄った、加藤さんが唄ったと満座の若い人たちは一斉に立上って手を拍ち足を踏みならした」と、周囲の興奮ぶりが伝わってくる。

下ダバ、エコノテデー、アメフリナカニ、カサコカブラネデ、ケラコモキネーデ

五節に分かれていて、短歌のようにも見えるが、加藤がうたった歌の歌詞だろう。津軽弁が、外国語のようだ。雨が降っているのに傘もささず、合羽も着ないで、どうしたことですか、といった意味だろうか。意味は正確に把握できてないが、声をはりあげて歌う、その声は聞こえてくるようだ。地の文に差し挟まれたカタカナが、見た目にもアクセントになると同時に、この紀行文の世界を立体的に、生き生きと感じさせてくれる。

さらに、「彼は瘦軀をゆすりながら眼を瞑じて繰返し繰返しこの唄を唄っている」と、加藤の外見描写が続いたあと、「私は心ひそかに彼が竹馬の友いま東京にある和田山蘭を憶い起さざるを得なかつた」と、その内面に及んでいる。「和田山蘭」は、

「青森県近代文学館」のホームページに「北津軽郡松島村(現五所川原市)で生まれ育ち、同郷の加藤

東籬とともに新派和歌の研究會である蘭菊會を結成」とある。正に「竹馬の友」だったわけだが、和田は大正二年に上京し、小学校の教師をしながら歌人として活躍している。牧水も和田の才能を認めていたということで、東京で歌の場を同じくすることもあったのだろう。病のために上京が果たせなかつた加藤と対比させ、その心境を慮っているのである。この座の中には、和田山蘭の弟の和田靈光もいた。

つまり、酒席の座を囲む周囲の描写から入り、加藤の歌とその容姿を描写したのちに内面を促す記述が入る、という流れである。この流れに添ううちに、今名前を覚えればかりの加藤東籬という人物へ深く心を寄せている自分がある。その心の



青森から上京中の加藤東籬を迎えて(大正7年1月)
前列左から若山牧水、加藤東籬、和田山蘭

前に立ち現れるのが、次の歌である。

泣く如く加藤東籬が唄うたふその顔をひと目
見せましものを

泣いているかのように渾身の歌をうたう加藤東籬のこの顔を、ひと目あなたに見せたい。前の文章から、見せたい相手は、和田山蘭、ということになる。「泣く如く」というフレーズが、心に沁み入る。瘦せた加藤の身体からふりしぼるように声が放たれる様子が浮かんでくる。

若山牧水さん、こうして本当に会えて、うれしい、うれしくてたまらない。だからうたう、はじめて人前でうたう。山蘭君、君にこの歌声が聞かせるかい……。

牧水の歌から、加藤の心がほとばしる。この感動は、短歌という詩型による表現ならではだと思ふ。もしも地の文で、「加藤君はまるで泣いているみたいに、必死に唄を歌っている。いい顔だ。東京にいる和田君に一目見せたいものだ」などと書いたとすると、なんだか書き手の牧水が偉そうな感じになって、感動どころか、逆に心が冷めてしまっただろう。短歌として詠むことによって、この歌の世界の主役である加藤の痛切な心がダイレクトに読者に届く仕組みになっているのだ。

又、この歌だけ単独で読んでも、この感慨はなかなか伝わらないだろう。散文と韻文とが補い合い、情況説明と情感という、それぞれの得意なポジションで、持ち味を発揮しているのである。

ミュージカル俳優が、感情の高ぶりをメロディに乗せて歌い上げるように、紀行文では、その登場人物の心の盛り上がりや短歌に託すことがある、ということを実に伝えてくれる場面である。

以上は、津軽に着いた最初の夜の場面だたいへんにぎやかだが、翌日は一転して、加藤の農家があるしずかな山あいや「凍った雪を踏んで」訪ねている。「煤けた床の間には同じく煤けた沢山の書物が積んであった。この部屋で、彼のあの静かな静かな歌が今まで作られていたかと思うと、何ともいえないなつかしさやありがたさを覚えしめられた」と、牧水は、加藤の部屋をしみじみと眺めている。

その次の、四月一日の朝、牧水は細かな雨の降る中で、墓の鳴き声を耳にする。「こんな深い山中で何処に忍んで鳴くのだろうと不思議であった。見渡す限り平らかな雪の中をあちこちと多くの人が櫓を引いて歩いている。それは各自それぞれ田の雪の上に肥料を運んでおくのだそう」と、どこかにいるはずの墓と雪深い土地に生きる人々とを描写している。南九州で生まれ育った牧水の、北国に生きる人々に対する畏敬の念がほの見える。

白雪のいづくにひそみほろほろとなきいづる
墓か津軽野の春

そこに置かれた一首。白い雪の中に響く墓の鳴き声が、やさしく、神秘的に感じられ、白雪を抱く早春の津軽野の風景がのびやかに広がっていく。散文部分では、墓の鳴き声を耳にした作者の

体感とその内面を描き、オノマトペを用いた短歌によって風景を広げている。映画で、人の顔のアップから一気に風景へとつなげて、その情感の広がりや現す方法に似ている。この一首は、散文と響き合わせてその内実を知った上でも感慨深いし、詳細を知らぬまま叙景歌として読んでものびやかなのびのびの歌である。この一首は、歌集『朝の歌』の中に「東籬君宅にて初めて墓を聞く」という詞書きと共に収録されている。

このように見えていくと、牧水の紀行文においては、散文の中に置かれた短歌によって、そこに描かれている場面の主体が切り替わり、時に情感に直接響き、時に神的視線のような広がりを持たせている。読むと一緒に旅をしているようなわくわくした気分になれる牧水の紀行文の秘義が、ここにある。

「筆者プロフィール」 ひがし なおこ



昭和三十八年広島県生まれ。
歌誌「かばん」会員。歌壇賞
及び角川短歌賞選考委員、
東京新聞歌壇選者。早稲田
大学文学部文化構想学
部教授。

「草かんむりの訪問者」で第七回歌壇賞を、「いとの森の家」で第三十一回坪田譲治文学賞を受賞。歌集に『春原さんのリユーター』『青卵』『東直子集』『十階』。小説、エッセイに『千年ごはん』『とりつくしま』『晴れ女の耳』『七つ空』『二つ水』ほか。平成二十八年三月に開催した第二十七回「籬の歌会」の講師。